

同窓会

# ニュース・レター

第7号

大阪大学  
文学部  
文学研究科  
同窓会

2008年3月20日発行

博物館のマチカネワニのレプリカ  
(本物化石は3階)



新設 大阪大学総合学術博物館(修学館)

## 文系総合研究棟の新築

2007年10月に大阪大学と大阪外国語大学が統合しました。今年4月に大幅に増加する新入生に対応するため、文学部を含む文系学部の教育研究スペースとして地上7階建ての研究棟が豊中キャンパスに新築されました。

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部・文学研究科同窓会

URL

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>

E-mail

[dousoukai@let.osaka-u.ac.jp](mailto:dousoukai@let.osaka-u.ac.jp)

# 今年は文学研究科と 文学部の六十周年

文学研究科長

天野 文雄

ちょうど十年前の平成十年の秋、文学研究科は創立五十周年を記念して、「文学部は必要か」21世紀の人文学の確立にむけて」という、いささか意表をつくテーマのもと、鶴見俊輔、富山多佳夫、グレゴリー・クラークといった論客を招いて、後援会とシンポジウムからなる記念行事を催している。文学研究科からは、当時研究科長だった川北稔教授がパネリストとして加わり、司会はたしか現総長の鷲田教授で、会場は千里ライフサイエンスセンターだった。また、シンポジウムにつづいて行なわれた記念式典では、狂言大蔵流の茂山

千之丞と茂山あきらのお二人に、狂言『靱猿』のさいごに歌われる「なお千秋や万歳と、俵を重ねて面々に、俵を重ねて面々に、楽しんでうなるこそめでたけれ」という祝言の謡を、文学研究科五十年の歴史をおりませで歌ってもらった。このときにはまた、『大阪大学文学部50年の歩み』という、写真を主体にしたしゃれた五十年史を刊行しているが、いま思うと、ずいぶん意欲的な企画ではあった。

それから十年後の今年も、もちろん文学研究科の六十周年になる。しかし、現在までのところ、研究科内には、六十周年を記念する催しについ

ての企画はとくに出ていない。十年前には盛大な記念行事を催しているし、五十年とか七十年に比して、六十年は区切りとしては中途半端だということもあるのだろうが、小生などは、もういちど「文学部は必要か」というテーマでもよし、六十周年を祝ってみてはどうかかと思っている。などと思つのは、昨年の秋に、やはり昭和二十三年創設の名古屋大学の文学部の(前倒しの)六十周年に来賓



プロフィール

昭和21年、東京に生まれる。早稲田大学第一法学部、国学院大学文学部卒業、国学院大学文学研究科修了。文学博士。国学院久我山高専、上田女子短期大学をへて、昭和62年、大阪大学文学部に助教授として着任。平成18年4月から文学研究科長、文学部長、日本演劇学会会長。専門は能楽研究で、著書に、『翁猿楽研究』(平成7年、和泉書院)、『能に憑かれた権力者』(平成9年、講談社)、『現代能楽講義』(平成16年、大阪大学出版会)、『世阿弥がいた場所』(平成19年、ペリかん社)がある。



として招かれたこともあるが、それとは別に、この十年のあいだに、文学研究科は教育研究の両面で多くの実績を積み重ねてきていると思うからである。はい話、この十年は文学研究科が重点化された十年でもあるのだが、六十周年を祝ってシンポジウムなどの記念行事を催すことは、その十年を総括するよい機会にもなる。

聞けば、同窓会では、九月十三日に文学研究科と文学部の六十周年を記念して、千里阪急ホテルで六年ぶりに総会を開催する予定だという。文学研究科としては、ややおくれをとった感もあるが、できれば六十周年を記念する学術的な催しを、これからでも企画してみてもどうかと思う。それには文学研究科の構成員だけでなく、同窓会と会員諸氏の協力が不可欠と思うが、この秋、文学研究科らしい格調高いイベントが実現して、皆さんとともに、文学研究科の過去と現在、そして未来を語ることができれば、と願っている。



# 阪大でランチを 食べませんか

その1

## 大阪大学博物館 ミュージアムカフェ坂

文学部同窓生の皆様で、阪大豊中キャンパスに長らく来られていない方も多いかと思えます。そのような方々に、是非阪大に足を運んでいただくため、文学部同窓会二ユーズ・レターでは本号から、「阪大でランチを食べませんか」というタイトルで特集を組むことになりました。

第六号の表紙に写真を載せました通り、阪大坂が全面改装されて美しくなりました。それに次いで去年八月、阪大坂入り口・旧医療短期大学跡地に大阪大学総合学術博物館（修学館）がオープンしました。医療短大の建物を全面改装した美しい三階建ての博物館では、かの有名なマチカネワニ（キャンパス内で発掘された、全長八メートル化石の本物）が展示されており、阪大の歴史、阪大の生んだ偉人、待兼山の自然などが、モダンで魅力的なディスプレイによって紹介されています。阪急宝塚線石橋駅から徒歩五分と至便な場所にあり、入場無料の博物館へ是非一度いらしてください（詳細は、<http://www.museum.osaka-u.ac.jp/>）。

博物館の一階には、おしゃれなミュージアムカフェが併設されています（<http://www.ooop.osaka-u.ac.jp/syokudo/saka/>）。音楽が流れ、間接照明のレストランでは、モーニングメニュー、グリルセット、サラダ、コーヒーなどを気軽に楽しむことができます。お帰りの際は、コーナーにあるショップで、阪大グッズや鷺田総長ご推薦の本などを買い求められるのも一興かもしれません。自然豊かな裏山を通るプロムナードを辿れば、阪大坂の上に通り返ることができます。

すっかり様変わりした阪大豊中キャンパスの、博物館ミュージアムカフェでランチを食べませんか？マチカネワニがお待ちしています。



# 同窓生へのメッセージ

## ◆阪大文学部「同窓会」のこと

フランス文学専修教授 柏木 隆雄

昭和四十年（一九六五）に文学部に入ったから、四十三年前のことになる。その頃の話は、『阪大春秋』が編纂された時に「往時茫々」と題して語った。同期の杉野欽吾君と親しく往来し、大江健三郎王安の彼から『厳肅な綱渡り』などを彼の自宅で見せて貰ったことがある。大事な河出版『世界文学全集』の内の一冊、『チェーホフ・ガルシン・コロレンコ集』を教室に忘れて紛失、がっかりしていた姿が大仰だったのだろう、鈴木（現姓赤木）順子さんが、入学祝いに沢山貰ったから、と図書券をくれて慰めてくれた。それで出たばかりの『ヴィヨン全詩集』など岩波文庫を幾冊も買って元氣回復。その厚情忘れがたい。今の待兼山会館の建っているところが芝生になっていて、そこで車座になりながら杉野君や鈴木さんたちと岩波文庫などを一緒に読んだりした。ドイツ史をしている山田義顕君とは教養部時代、ほとんど毎晩のように飲み歩いた。ABCヤングリクエストが始まって、仁鶴の音が聞こえ出すと、寮の扉を叩いて山田君が来る。二人で待兼山を降りていって、ほんの小さな店構えの「祇園」とか「池市寿司」へ出かけた。一度帰り道でやぐざ風の若い男に絡まれ、二人とも必死になって逃げ出したが、お互いの安否を確認する暇もあらばこそ、一目散だった。国鉄が値上げするその前夜に彼の故郷の下関までの学生割引切符を買って、鳥取砂丘やらあちこち途中下車しながら、彼の実家までたどり着いた珍道中も懐かしい。

しかしこうした牧歌的？な交友も一度専門に上がつてしまうと、段々に頻度が落ち、まして大学院、教職というコースを辿る頃には、それぞれの勉強やつきあいに忙しくなっていて、いよいよ年賀状程度のやり取りになってしまふ。教養部時代の交友を今に甦らせるのは、やはり全体の「同窓会」というものだろう。この同窓会の仕事は、同期入学で、それこそ待兼山会館の傍での読書会以来、ずっと面倒掛けっぱなしの玉井暉さんと二人、偶然同時に文学部の英文、仏文の助教として赴任した秋の幹事会で、それまで幹事交代を心待ちにしていたらしい先生方から、次は君たちが、と託され、以来同窓会の何らかの役を仰せつかつてきた。各学年の同窓会も、それぞれ活発に活動している卒業年次の方たちもあるが、それほどでもないところがある。一般に文学部初期の人たちの会の方が熱心なようだ。それは一つには年齢のせいもあるが、一区切り仕事の段落がついたところで、ふつと昔の仲間との話が楽しくなる。若いときには気づかなかつたことや、年を取ってから、あらたな感慨をもつて思い起こすことも多いからだろう。まず「還暦」祝いを口実の集まりが、そのきっかけとなることもあるかも知れない。

私自身は同窓会の仕事をしていて、いろいろ新しい経験をした。とりわけ長年会長を務めて頂いている石原実氏と知り合い、いろいろお話ができたのは同窓会に携わってこそで、石原氏の大阪教育大付属小学校での同級生手塚治虫についてのいろいろなエピソードを氏から伺うのは、実に楽しい興味深い。先頃は石原氏と同じ同級生が書いたという手塚の小学校時代を描いた本を頂戴して、読みふけり、手塚大ファンという仏文の学生さんに貸してあげたら、とても喜ばれた。貴重な情報が満載されているので手塚ファンは必読。石原氏はまた珍しい切手蒐集家としても知られている。とにかく文学部同期生でいらつしゃるので、つい何事も相談してしまうけれど、いつも懇切に対応してくださる名会長である。

私も退職の日が近くなると、先の先輩教授たちのように、次世代の幹事を若い同僚の先生方に引き受けてもらうように考え、入江さんや服部さん、和田さんという仕事を押しつけてしまった。今年同じく退職するドイツ文学の林正則先生は、ここ数年、代表幹事として「同窓会ニュース・レター」の編集に心を砕いてくださった。出発の初号の編集は大変だったと聞くが、こうして号を重ねることによって、その意義がますます実感されて来ている。また学内の人間だけでなく、むしろ学外の方々の積極的な参加が望まれるから、今後もさまざまな形でのPR活動は必要だろう。

そのもつとも重要な節目が今年秋に予定されている大阪大学文学部創立六十周年に合わせた同窓会総会だ。先の五十周年の時にも沢山の同窓生が参加して、実に愉快な会になったけれど、いわゆる「還暦」を迎えたわれわれ文学部同窓会は、いっその盛り上がりを見せて成功裡に終わりたい。同窓生諸氏の積極的な参加を期待して、阪大文学部を去る言葉としたい。



柏木 隆雄

1944年三重県松阪市生まれ。フランス19世紀文学、とりわけバルザックを専門とする。著書に『イメージの狩人 評伝ジュール・ルナール』（臨川選書）、『謎とき「人間喜劇」』（ちくま学芸文庫）など。

# 退職なされる先生方から

## ◆待兼山、そして待兼人

ドイツ文学専修教授

林 正則



昔から内気で(?)で引つ込み思案(?)、そのうえ口べたと来ているものだから、講義など得意なはずもない。そんな私がここまで千鳥足ながら辿りつけたのは、ひとえに聡明で寛容な学生諸君、度量の大きい同僚の諸先生(三谷准教授は言うまでもないが、向う三軒両隣、西洋文学語学講座の先生方、とりわけ柏木先生には蔭になり日向になって支えていただいた)のおかげである。よくぞ辛抱して下さったと、感謝あるのみ。フルマソン、言うように何とかゴールに倒れこんだが、まわりの方々はさぞやはらはら、いや、そろそろ堪忍袋の尾も切れる寸前ではなかったらうか。

十八歳で大阪大学に入学して、四十年。ドイツにいた二年半を除けば、待兼山に通い続けた歲月であった。私の背丈くらいだった若木が、今は巨木になっ



ている。ほとんど毎日、土日も研究室にやって来て、朝から晩までそこにいて、そして、さしたる成果もあげられずに帰っていった。四十年、そんな毎日の繰り返しであった。要は、待兼山が好きだったと言っしかない。待兼山の自然が好きだったし、「待兼人」(まちかねびと)たちが好きだったのである。「飽きない懲りない後悔しない」が身上の、私の「虚仮」の一念というべきか。

だから七十年の大学紛争は悲しかった。文学部がバリケード封鎖され、院生の私は行き場を失った。大学の周辺を野良犬みたいにくらうるとさまよい歩いてきた。そして、友人にバツハのことを教わつてからは、自宅で来る日も来る日もひたすらバツハ、それもカンタータばかりを聞いていた。人声が懐かしかったのかしらん。

一九九五年の阪神淡路大震災はもっと悲しかった。助教授のころである。その日はさすがに大学に出かけるわけにいかなかった。自宅マンションのダメージが大きすぎたから、家族に研究室に行つてきますとは言い出せなかった。当時の阪井助手が、「先生の部屋は浸水しています」と電話で連絡してくれた。こんな日にも大学に出て、阪井さんはえらいと思つた。「倒れた書架でドアが開かないが、隙間から覗くと、床が水浸しだ」という。重い足を引きずつて大学に向かう途中、グラウンドを十センチくらいの断層が縦走しているのを見た。私の部屋では流し台が崩落して、上階の排水が流れ込んでいた。恩師

の田中健二先生が亡くなられたのは、その数日後のことであった。研究会仲間のMさんが自宅の倒れた書棚の下から発見されたのは、二週間以上たってからであった。そのとき以来、私はまるで「人間液状化」を起こして、何を見ても涙が止まらなくなった。

私の机の上には、「小学館独和大辞典」のコンパクト版が二分冊になって置かれていた。排水に「漬かって」いた辞書を長いことかかって天日乾しし、「ページページ丁寧にアイロンをあてた。糊貼りしたみたい」に複数ページが貼りついて剥がせない箇所か何箇所もある。乾かして重石を置いて、いったん膨らんだものはもとの倍の厚みになった。そこで、ナイフを入れて自分で二分冊に製本しなおしたのである。以後ひたすらその二分冊を使い続けた。十年位たつてから、小学館の「営業さん」が見えたときにその話をしたら二分冊の「独和大辞典」に向かって「ありがたいことです。南無阿弥陀仏」と手を合わせて拜んでくださった。それから、新しい「大独和」を使うようになった。しかし二分冊は今も、いつも私のそばにいてくれる。

水に漬かった電子辞書にアイロンはあてられない、というのが学生諸君に贈ることばである。



林 正則  
ドイツ文学専門分野。研究分野:ドイツ古典主義文学、特にゲーテ、シラーを中心に。著書『ドイツ市民劇研究』(共著)、『仮面と遊戯—フリードリヒ・シラーの世界』等。論文「ゲーテとフランス革命」、「ゲーテにおける自然科学と言語—ロマン派との接点を求めて」等。

◆ 日本文学



2007年研究室旅行

純・伊井春  
樹出原隆俊  
国語学では  
池上禎造・  
宮地裕・前  
田富祺・蜂  
矢真郷と統  
き、教養部  
合流時には、  
国文学に後  
藤昭雄・荒  
木浩・渡邊

志津子、国語学に山口堯二の各教官がいた。九五年には大講座制となり、人文学科国文学・東洋文学講座国語国文学専攻となった。九九年の大学院重点化では同講座の中の日本文学専門分野・国語学専門分野(学部は日本文学・国語学専修)となった。名称などは変わったが、国語国文学会「語文」の維持・発展は堅持され、課程博士を次々と送り出すことなどは従来になかったことだが、大学院学生などの研究発表会などでの厳しい質疑など、研究室の学問研究の姿勢には質はなく、八今昔の感々はない。このことは本年の学会での島津忠夫名誉教授の研究発表、信多純一名誉教授の講演といえよう。現スタッフは日本文学が出版隆俊・荒木浩・飯倉洋一・加藤洋介、国語学は蜂矢真郷・金水敏・岡島昭浩である。

(出原 隆俊)



1964年小島吉雄先生最終講義

研究室今昔

◆ 「阪大考古学」スタイル



第1回研究室旅行 岐阜県峰一合遺跡 1988年

「阪大考古学」の源流は一九六〇年代に国史研究室が行った南河内の古墳調査にあり、一ヶ月以上の合宿調査を学部生で三回、大学院生ではそれ以上に経験するわけですから、学生や教員のつながりはとても強いものになります。この二〇年間の卒業・修了生は二六〇名あまり。三分の一が考古学の専門職、三分の二が考古学以外の道に進んでいますが、進路にかかわらず今でも研究室とのつながりを保っている人が多いのはそのためだと思います。毎年の発掘調査の宿舎には多くの先輩から山のような？差し入れが届けられ、学生が夜のミーティングの後でせつせと礼状を書く光景がみられます。本誌に小文を寄せる機会をいただいた今年は、宿舎での夜の仕事をさらに増えるのではと楽しみにしています。

都出先生は「二、三年で考古学講座をつくれるから」と阪大に誘われたそうです。でも実際は九年。一九八八年四月、都出教授、大学構内遺跡の調査にあたる埋蔵文化財調査室の兼務助手(筆者)、学部生5名、大学院生5名の小さな所帯が国史研究室から独立し、ようやく考古学研究室は生まれました。都出先生が退任された二〇〇五年以降は、福永伸哉教授、高橋照彦教授の専任教員

二名が教育研究を担い、埋蔵文化財調査室の寺前直人助教が本務のかたわら考古学研究室を兼務する体制となっています。今も変わらぬ「阪大考古学」のスタイルは、徹底したフィールド調査です。二〇年には、わたつて毎年研究室の発掘調査を続けてきた大学は日本ではきわめてまれで、調査研究の水準は日本のトップレベルにあるといっても過言ではありません。



発掘宿舎での夕食 2007年

(福永 伸哉)

## QOL(クオリティオブライフ)の向上を目指して

長島 今日子

私は医療機器メーカーの営業として、日々、病院を訪問し、医療従事者の方に医療情報を提供している。私の担当製品の中に「胆管ステント」という器具がある。「胆管」は、肝臓で作られた胆汁を十二指腸へと送る消化管だが、何らかの原因でそれが狭窄すると、胆汁が逆流し「黄疸」を引き起こす為、胆汁をスムーズに流す処置が必要となる。原因が良性疾患の場合はチューブで体外に胆汁を流し症状を改善させるが、末期がんの場合には、ステントという金属の筒を留置し、胆管を押し拡げる方法がとられる。この製品の営

業をしていると、末期がんの患者様を根本的には救えない虚しさはどうしても募る。

ところが、昨年のクリスマスは、そんな虚しさを忘れさせてくれる日となった。この日もある病院でステント使用説明の為、オペ立会いを行っていた。先生がいつにも増して強い意気込みを感じさせていた。複雑な症例であった為、術前にメーカーとしてできる最大限の提案をさせて頂き、先生も思い描いていた手技ができたようで、無事に処置が終了した。局所麻酔下の患者様と先生の会話が聞こえてきた。「正月は家族と紅白みれるなあ。」ステント留置前はチューブに繋がれ

## テレビ局に入社して

関本 善和

昭和六十三年に仏文を卒業し、関西テレビ放送に入社、主に報道系の技術部署で、働いていました(現在は、東京支社総務部勤務)。

よく、日本では入社してから教育するので、出身大学の専門性は問われないといいますが、第一級陸上特殊無線技士免許を持つことまで想像していませんでした。ちょっと極端な例かもしれませんが。

脳死移植、西成暴動、和歌山カレー事件、酒鬼薔薇事件、オウム真理教と、報道の時は随分といろいろな事に関わってきましたが、やはり阪神大震災が最も深

## 卒業生 近況

く、印象に残っています。報道カメラマンとして、発生直後に阪神高速倒壊現場に入った衝撃は忘れられることができません。延々と六百メートルに亘って横倒しになった高速道路と下敷きになった車。誰もいない、時が静止した世界と空の高さ。そして、それで終わりはなく、そこから真の震災の始まりだったと気付かされる毎日。報道を離れた今も強い拘りを持っています。関西の大学を出、関西の放送局に勤める自分の在り様と宿命と受け止めています。

さて、技術系部署が主だったこともあり、フランス(語)関係は、入社後殆ど関係なく過ごしてきました。

たままの患者様が、留置後はチューブフリーとなり、自宅に帰ることが出来る。患者様の明るい声に、残り少ない家族との時間を思い、自分が扱う製品の本当の意味―QOLの向上―を改めて感じた。その日、先生からいただいた「来てくれてありがとう。メリークリスマス」という言葉は、社会人四年目を迎えようとしている私にとって、医療業界で働く意義を再認識させる、心に残るメッセージとなった。



長島 今日子  
平成17年 大阪大学文学部  
人文学科英米文学・英語学専  
修卒業。同年、医療機器メー  
カーに入社。現在、IVR製品を扱  
う部門の営業職に従事。  
IVR…Interventional Radiology  
(低侵襲放射線治療)の略

地上波デジタル放送関連プロジェクトが一段落した数年前、再び学び直したくて有給休暇を利用して大学院に行き、二足の草鞋を履くことになりました。卒業後二十年近く経てまた戻った研究室は、助教教授だった先生が学部長に、助手の先生が教授に変わっただけで、学問をする環境は変わらず、有難いと思えました。結局、転勤の為、中退になりましたが、短い間だけでも学ぶ幸せを味わうことができました。



関本 善和  
昭和59年4月 大阪大学文学部  
入学。昭和61年4月 同 文学科  
仏文学専攻。昭和63年3月 同  
卒業。昭和63年4月 関西テレ  
ビ放送入社。平成17年4月 大  
阪大学大学院文学研究科文化  
表現論専攻(仏文学)に社会  
人特別選抜試験を経て、会  
社員のまま入学。  
平成19年3月 転勤の為休学の  
後、中退。現在に至る。

# 文学部・文学研究科創立六十周年 記念同窓会総会・懇親会の開催について

今年二〇〇八年九月十四日に、大阪大学文学部・文学研究科は、創立六十周年を迎えます。少し歴史を紐解いて見ますと、次のような経緯で最初の卒業生・修了生を送り出しています。大阪大学文学部は、一九四八(昭和二十三年)九月十四日に、文法・経三学科、十五講座からなる旧制法文学部として開設されました。同年十月二十日に第一回入学宣誓式が学生四十名を迎えて挙行されたと記録されています。文学部として独立することは当初から予定されており、翌一九四九(昭和二十四)年五月三十一日に、文学部と法経学部に分離し、かつ新制大学として再出発しました。一九五五年(昭和二十六年)に(旧制)第二期生二十五名が卒業されました。一九四八年の旧制法文学部開設と同時に旧制大学院もまた設定されましたが、一九五三年(昭和二十八年)三月に新制大学院文学研究科が発足し、一九五五(昭和三十)年三月に第一期生四名が博士前期課程を修了されました。

爾来、毎年卒業生修了生を社会に送り出し、現在延べにして約九七〇〇名の卒業修了生を数えるに到っています。文学部・文学研究科同窓会の前回総会・懇親会は、二〇〇二年五月五日に肥後橋センチュリークラブで開催されました。今年は、創立六十周年という記念すべき年に当たりますので、創立記念日の前日になりますが、以下のような日程、場所、同窓会総会・懇親会の開催を計画しております。

日時 二〇〇八年九月十三日(土) 午後二時半～午後四時  
会場 千里阪急ホテル

詳しい予定などは、また追ってご連絡申し上げます。楽しいひと時になりますよう、これから準備に励みたいと思いますので、ご参集のほどよろしくお願い申し上げます。

## 事務局便り

### お知らせ

#### ◆創立六十周年記念版(二〇〇七年度版)同窓会名簿

昨年六月に『大阪大学文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿』(創立六十周年記念版)が完成いたしました。制作を委託しました株サウトより郵送された「名簿作成確認はがき」に「ご返信くださいました皆様、ならびに名簿をご購入くださいました皆様、誠にありがとうございました。次回の名簿発行のために、ご自身またはご友人の方の記載事項に関する訂正・変更、その他お気付きの点がございましたら、同窓会事務局までご連絡ください。また、名簿への住所、電話番号等の不掲載を希望される方は、その旨ご連絡いただければ幸いです。

名簿のご購入は随時承っております。ご購入を希望される方は同窓会事務局にご連絡ください。販価(四千元)＋送料(二十九円)でお送りいたします。ただしご購入は同窓会会員の方に限定しておりますので、ご入会がお済みでない同窓生の方には入会手続きをお願いしております。あらかじめご了承ください。なお、同窓会終身会費(二万円)をお支払いいただいた方には冊呈しております。振込用紙通信欄に名簿希望の旨をお書き添えください。終身会費のお支払い、名簿代金のお振込みは、以下の郵便振替口座をお願いいたします。

□口座番号 0940179043  
加入者名 大阪大学文学部同窓会事務局  
\*お手数ですが、通信欄に①卒業・修了年度、②専攻・専修名をご記入ください。

### ◆『ユーズ・レター』について

二〇〇八年は創立六十周年記念総会開催の年にあたるため、本年は全卒業生・修了生の皆様に『ユーズ・レター』をお送りしております。来年以降も『ユーズ・レター』の受け取りを希望される方は、同窓会事務局までご連絡ください。次号は希望者のみへの郵送となります。『ユーズ・レター』は同窓会ホームページより閲覧可能ですので、こちらもぜひご覧ください。『ユーズ・レター』に関するご意見・ご感想をお待ちしております。  
なお、『ユーズ・レター』を含め、今後、同窓会からの各種案内の郵送を希望されない場合はその旨ご連絡ください。

### ●お願い

◆住所変更について  
住所変更・勤務先変更等ございましたら、必ず同窓会事務局までご報告ください。名簿への住所、電話番号等の記載拒否を希望される場合は、その旨あわせてお知らせください。皆様の協力をお願い申し上げます。

### ●募集

◇『ユーズ・レター』の「卒業生近況」への投稿を募集しております。  
ご自身の写真一枚と六百字程度の原稿を事務局までお送りください。  
◇同窓会の名称を募集しております。採用者には図書券二万円分を贈呈いたします。  
これまでに応募くださった皆様、どうもありがとうございました。

### ◆事務局メンバー

- 事務局長：入江 幸男(S五十一)
- 総務：渋谷 勝己(S六十二)
- 会計：村田 路人(S五十二)
- 企画・立案：和田 章男(S五十五)、三谷 研爾(S五十九)
- 広報・服部 典之(S五十六)
- アルバイト職員：馬淵 恵里(H十七)

- 住所：〒500-0853 豊中市待兼山町三番五号
- ホームページアドレス：http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/
- 事務局メールアドレス：dousoukai@let.osaka-u.ac.jp